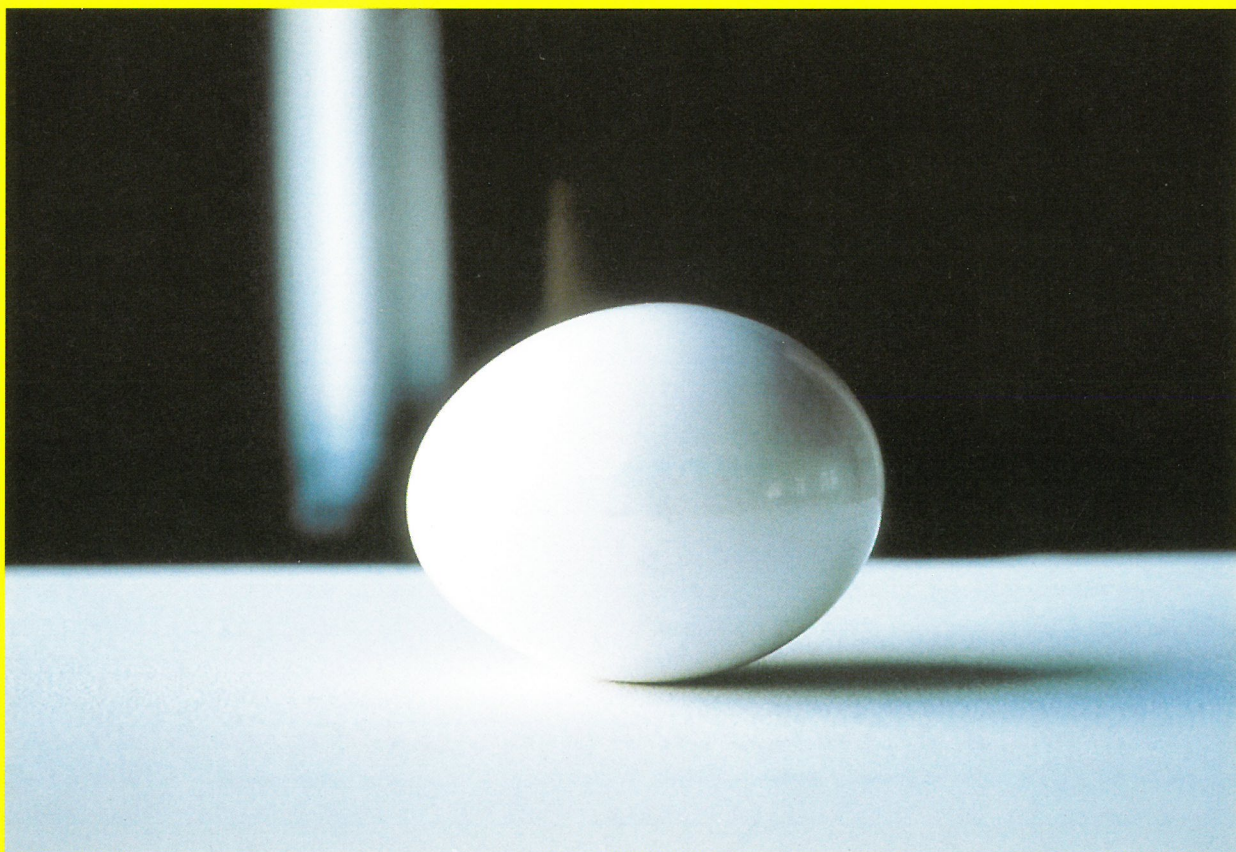


C'n

vol. 17

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART

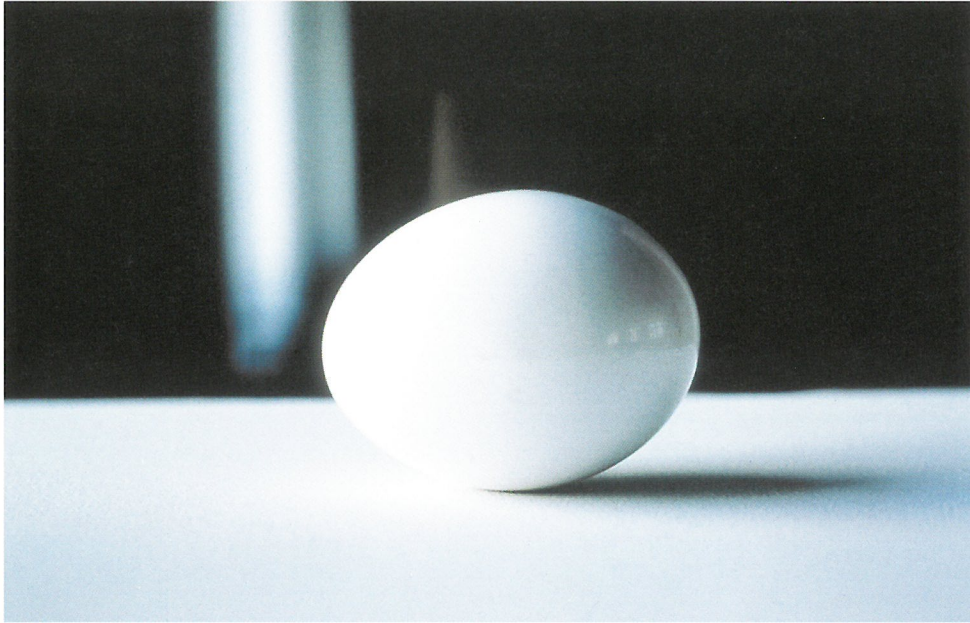


ミニマル マキシマル

ミニマルアートとその展開 現代アートの原点がここにある

2001年6月3日(日)まで

寡黙の芸術



カーリン・ザンダー〈磨かれた鶏卵〉1994/5年

再び春が巡ってきました。木々の枝には若い葉が芽吹き、地には青い草がよみがえってきました。長い冬のモノグロームの世界が終り、明るく、華やかな色彩に満ちた、豊饒のときを迎えようとしています。

新しい年度に入って最初の企画展は、「ミニマル マキシマル」という現代美術の展覧会です。すでにヨーロッパの数会場で公開され、評判を集めたこの展覧会には、「ミニマルアートとその展開」という副題がついています。

「ミニマル (Minimal)」とは、「最小限の」という意味の形容詞であり、「マキシマル (Maximal)」とは反対に「最大限の」という意味の言葉です。リチャード・ウォルハイムという哲学者がすでに1965年に「最小限の芸術内容」と名付けたこのミニマル・アートとは、外見上は単純でありながら、その意味するところは複雑かつ深遠で、最大限の知的、感性的反応を見る人に要求するものであるようです。要するに「寡黙の芸術」といってよいのでしょうか。

1960年代に台頭してきたこの前衛的な芸術運動は、アクション・ペインティングやポップ・アートのような、騒がしく、低俗で、大仰なそぶりの前衛美術に反発した、対極的な方向性をもつものでした。ちょっと取りずまして冷やかな、取っつきにくい無表情なところもありますが、この喧噪いちじるしく不安な現代にあってこそ、時には向き合って鑑賞したくなる芸術といえましょう。

寡黙な芸術といえば、私たち日本人にとってすでにお馴染の

ものです。たとえば、龍安寺の石庭が思い出されます。長方形の白い砂の上に大小15の石が点在させられているだけで、一本の木や草も排除された禅寺の庭です。枯山水とも呼ばれるこの無機質な庭は、かえって人の心を惹きつけ、そして逆に心の空虚さを埋め、ざわついた動揺を静かにやわらげ癒してくれるものがあります。無言の内に多くのことを語りかけてくれるこの庭には、年寄りばかりでなく若い人たちをも引きつけるようで、いつも方丈の前の縁側には老若男女が大勢座り込んで、思い思いのひとときを楽しんでいます。

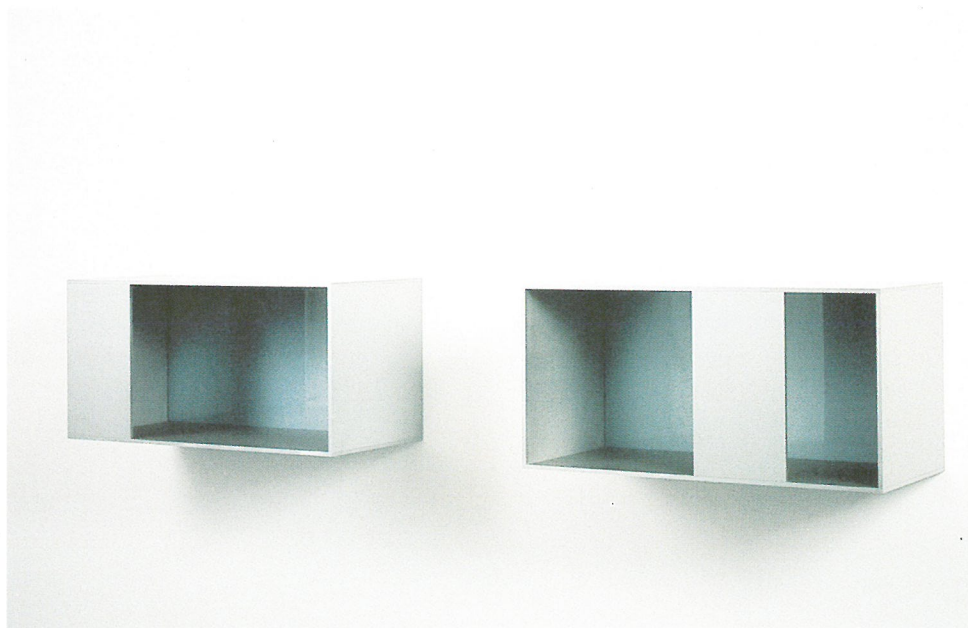
水墨画という抽象性の高い絵画や、土の質を愛する陶器、涼しく冴えた鋼の肌と微妙な反りの単純な形が美しい日本刀、まだまだ様々な寡黙の美の伝統を想起することができるでしょう。

東洋の哲学の淵源に立つ『老子』は、無とか空、虚とか拙とかということの大切さをくり返し述べています。器は虚ろであればその中に満たすことができるのです。本当に巧い人の業は、かえって拙く見えるものです。「己れは独り虚を取る」とか「大巧は拙なるごとし」とか、こういう考え方を私は日頃から大変好んでいるのですが、ひよっとするとミニマル・アートとは、東洋の哲学や美学に通ずるものがあるのかな、などと思い始めています。

現代美術を敬遠しないで、どうぞ普段着の心と目をもって美術館にお出かけ下さい。そこでは意外になつかしい出会いが待っているかもしれませんので。

千葉市美術館館長 小林 忠

ミニマル・アートとは何か？



ドナルド・ジャッド〈無題〉1988年

ミニマル マキシマルは、「ミニマル・アート」と呼ばれる動向を紹介する展覧会です。日本で開かれたミニマル・アート展の中では、最も包括的かつ大規模な企画と言ってよいでしょう。

多くの方々にとって、「ミニマル・アート」はあまり馴染みのない言葉かもしれません。ミニマル・アートが登場したのは1960年代中頃なので、西洋美術の長い歴史のなかではかなり新しい動向と言えます。近年出版された『西洋美術史』（高階秀爾監修、美術出版社）という本をみると、レオナルド・ダ・ヴィンチ、印象派、ピカソと続く西洋美術の歴史の末端に（まさに一番最後のページに）、今回の展覧会にも出品されているドナルド・ジャッドとダン・FREYVAINの作品が紹介されています。現在彼らは、ゴッホやピカソのような、時代を代表する重要な美術家になりつつあります。その誕生の地アメリカだけではなく、世界中で、ミニマル・アートは高く評価されているのです。

「最小限の美術」

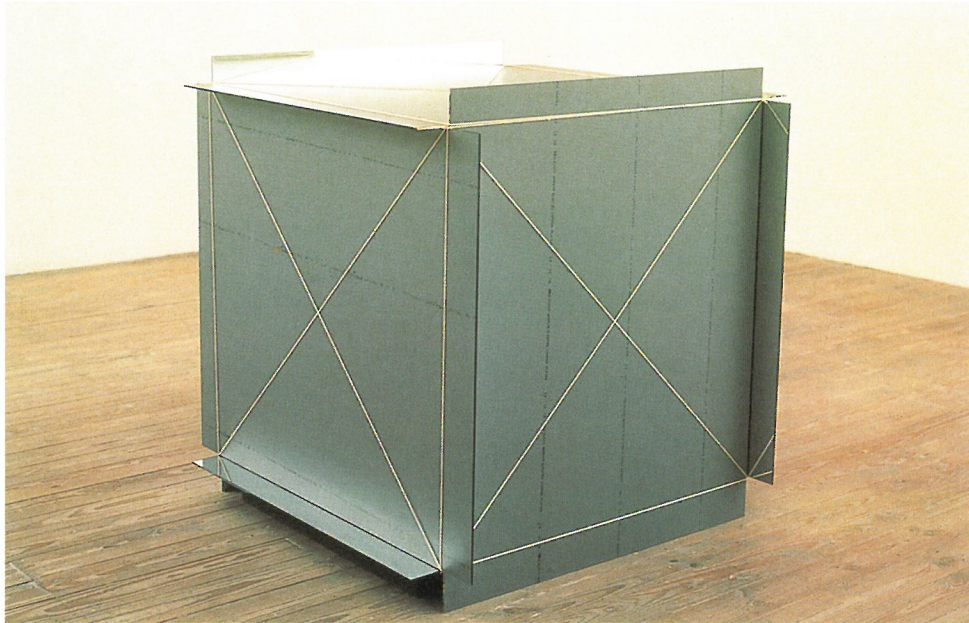
それでは、ミニマル・アートの作品を実際に見てみましょう。ミニマル マキシマル展の出品作のなかに、ミニマル・アートを代表する美術家ドナルド・ジャッドの《無題》という作品があります。一見すると、壁にアルミ製の箱が2つ並んでいるだけのように見えますが、実際それ以上のものではありません。これは、

単なるアルミの箱にすぎないのです。底板がアクリル板（プレキシグラス）という以外、なにか特別な仕掛けがあるわけでもありません。また、哲学的あるいは超自然的意味を象徴的に秘めているわけでもなければ、いわゆる「反芸術のオブジェ」でもありません。

この作品は、美術を見慣れた人でも見慣れていない人でも、瞬時に全体像を把握できる単純明解なかたちをしています。一般的な美術作品のように、作品をじっくり観るにつれて、最初気づかなかった様々な要素が浮かび上がってくることもありません。初めて見たときも、何十回も見たあとも、この作品はきわめて単純な箱形として私たちの前に現れるのです。

1960年代、このような作品が続々と登場してきたとき、人々はそれらに「最小限の美術」すなわち「ミニマル・アート」という呼び名を与えました。美術に付きものの装飾的な要素が排除されて、作品のかたちが、「最小限（ミニマル）に」まで「切りつめられて」いたからです。ただし最初にこの言葉が使われたとき、ミニマル・アートには、「かたち」よりむしろ「内容」が「最小限の」美術という意味が込められていたのです。伝統的な美術に慣れ親しんだ人々の目には、単なるアルミの箱は、「内容」の希薄な何か理解しがたいものに見えたことでしょう。

私たち日本人の多くも、日頃伝統的な美術を見慣れており、現代美術を見る機会は少ないように思われます。この理解しがたい



ミケランジェロ・ピストレット〈無限の立方体〉1965/6年

ミニマル・アートをどのように見ればいいのでしょうか。

ミニマル・アートの見方

ミニマル・アートの作品の多くは、美術作品というよりむしろ工業製品に近いように見えます。実際それらの作品は、鉄、アルミニウム、木、ガラス、プラスチックなど工業用の素材を用いて、家具製作や建築の技法でつくられています。ダン・フレイヴィンに至っては、お店で売られている蛍光灯をそのまま作品にしているほどです。そこに芸術家自身による手仕事の跡を発見することは、ほとんど不可能でしょう。

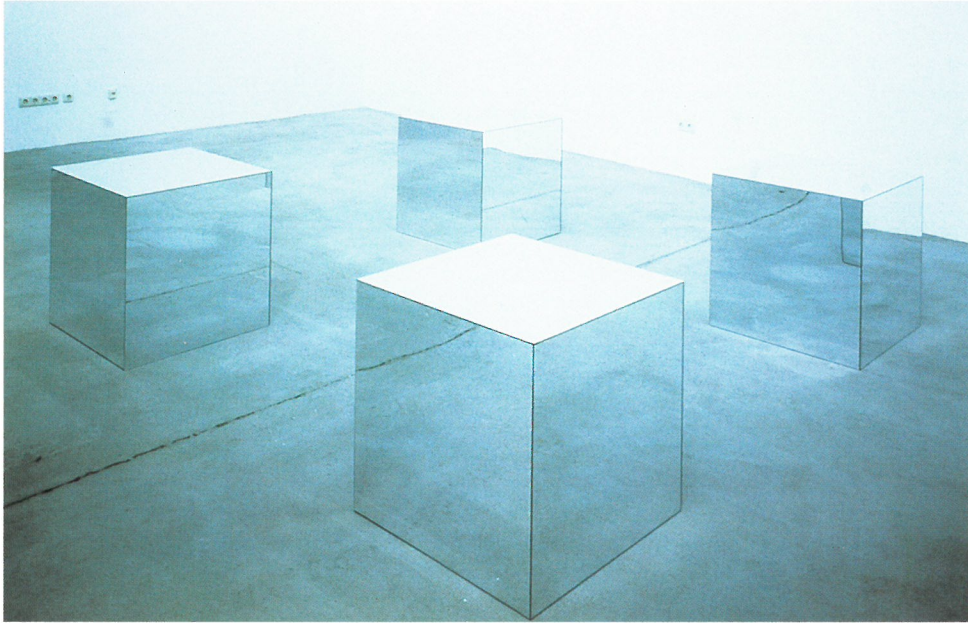
60年代当時、先ほど見たようなジャッドの箱形の作品を、あるアーティストは次のように評しています。「もしジャッドの箱の一つがガラクタで満たされ、工場のような場所に置かれたり、それどころか街角にただ置かれるだけなら、誰もそれを芸術(作品)とは見なさないだろう」。確かに、ミニマル マキシマルの出品作が美術館の外に無造作に置かれたなら、たとえ専門家でさえ、家具、建材、商業用ディスプレイなどと区別することは困難かもしれません。

ミニマル・アートの作品は、美術館やギャラリーの展示室のなかに置かれたとき、はじめてその力を発揮します。しかしそれは、美術館の展示室に置かれたことによって、アルミの箱が

芸術として認知されたという単純な理由からではありません。作品以外のあらゆる要素を排除した展示室という白い箱の魔力が、ミニマル・アートの幾何学的で単純なかたちを、芸術の領域にまで引き上げたからです。つまり、それ自体幾何学的でシンプルな箱型である純白の展示室は、ミニマル・アートの幾何学的でシンプルな箱形と、非常に相性がよいのです。両者は互いに共鳴しあって、独特のリズムと美しさを生み出すのです。

しかしこれでもなお、単なるアルミの箱がなぜ美しいのかと不思議に思う方がいるかもしれません。では、私たちの身の回りの家具や電化製品、車や建物を思い出して下さい。それらの大半が、機能を重視し過剰な装飾を省いた、いわゆるモダン・デザインで設計されていることは多くの方もご存じでしょう。私たちはこれらの製品を選ぶとき、単に機能や性能に目を向けるだけでなく、「美しい」、「かっこいい」といったある種美的な要素も考慮するはずですが、そこには、あまりに見慣れているために見落としがちな純粋主義の美学が介在するのです。

また美術史に通じた方なら、ミニマル・アートの幾何学的でシンプルなかたちを見たとき、モンドリアンやマレーヴィチの抽象絵画、パーネット・ニューマンやアド・ラインハートらの作品を思い浮かべるかもしれません。ミニマル・アートに見られる純粋主義は、デザインや建築のみならず、広く20世紀美術全般に流れているのです。ミニマル・アートは、まさに工業化



ロバート・モリス〈無題（鏡の立方体）〉1965/6年

と抽象化の世紀の精神と美意識を反映していると言えるでしょう。

以上の説明は、アンドレ、ベル、フレイヴィン、ジャッド、ルウィット、マックラッケン、モリスら、60年代の正統派ミニマリストに適用可能な、ミニマル・アートの基本的な解釈と言えるでしょう。しかし他の作家たち、——特に90年代に活躍している若い作家たちは、ミニマル・アートの幾何学的でシンプルなかたちを用いながらも、必ずしもミニマル・アートの、そして美術の枠内にさえ収まりきれない様々な問題を扱っているのです。彼らの作品は、美術館制度に対する批判であったり、消費社会に対する省察であったり、あるいは環境問題への関心であったり、様々なメッセージを内包しています。それらは、かたちの個性をこえた個性を持ち、60年代のミニマル・アートと関わりつつも全く異質のアートと言えるでしょう。

ミニマル マキシマル展は、ミニマル・アートの裾野の広がりを示すために、このような若い作家たちの作品も多数含んでいます。ここでそれらについて論ずる余裕はありませんが、展覧会カタログには出品作家・作品の詳しい解説が収録されているので、ぜひそちらもご覧下さい。

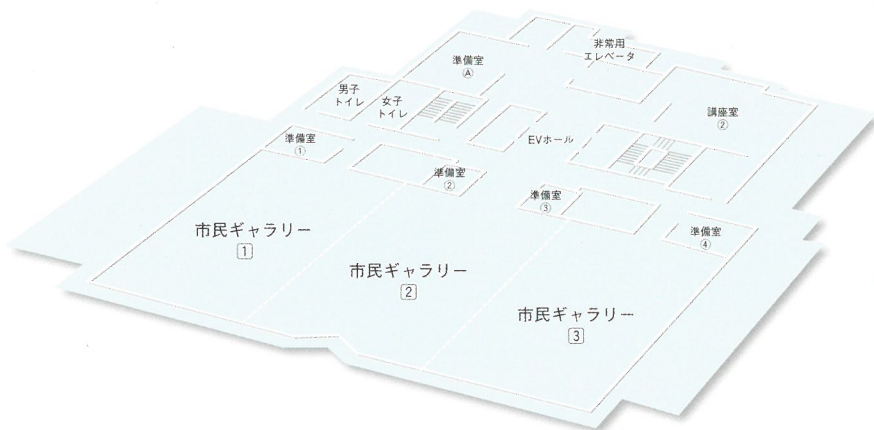
本館学芸員 水沼啓和



ピオトル・ウクランスキー〈ダンス・フロア〉

市民ギャラリーご利用の案内

9階の市民ギャラリーは、市内で活動する美術団体の方々に作品を発表していただくスペースです。



展示室	床面積	壁面延長	壁面高
市民ギャラリー①	162.0m ²	49.0m	3.0m
市民ギャラリー②	136.7m ²	37.6m	3.0m
市民ギャラリー③	162.0m ²	49.0m	3.0m

市民ギャラリーは①・②・③の三室に分かれ、それぞれが絵画をはじめとして、彫刻や工芸、写真など多様な展示に対応しています。

また、三室を合わせ、ひとつの大きな空間として利用することが出来ます。

6月30日(土)まで、2001年10月～2002年3月までの利用を受け付けます。

【利用時間】 10:00～18:00 (金曜日のみ20:00まで)

【休館日】 月曜日及び年末年始

※ご利用の際の手続きなど、詳しくは美術館までお問い合わせください。

「友の会」入会のご案内

千葉市美術館は開館以来、より身近な美術館づくりを目指しております。

千葉市美術館「友の会」は、美術を愛する人々にさらに親しまれる美術館づくりを進めるために誕生しました。

皆様のご入会をお待ちしております。

【会員の特典は】

■無料サービス

千葉市及び助千葉市教育振興財団が主催する企画展や常設展が無料で何回も観覧できます。

■割引サービス

千葉市及び助千葉市教育振興財団が主催する展覧会図録が割引（販売価格の10%引き）で購入できます。

千葉市および助千葉市教育振興財団が主催する企画展や常設展の観覧料が同伴者も割引（3名まで団体料金）になります。

■情報サービス

千葉市及び助千葉市教育振興財団が主催する講演会等の美術館情報をお届けします。

【会員の資格は】

- 会員期間は、入会日から1年間です（美術館パスポートの発行を持って、会費納入の領収書とさせていただきます。）
- 学生会員の方は、学生証をご提示（コピーも可）ください。
- 途中で退会されても、会費の払い戻しはいたしません。

- パスポート紛失等により再発行を受ける場合は、手数料が必要となります。

【会費の額は】

■入会金

- 一般会員 1,000円
- 学生会員（高・専・大） 500円
- ファミリー会員（大人2名と中学生以下の家族） 2,000円

■年会費

- 一般会員 年3,000円
- 学生会員（高・専・大） 年1,500円
- ファミリー会員（大人2名と中学生以下の家族） 年6,000円

【入会の申込み方法は】

- 美術館8階の入館者受付に備えてある「入会申込書」を利用し、お申込みください。
- 休館日（臨時含む）や年末年始は、お申込みできません。
- 詳細は、千葉市美術館 TEL: 043-221-2311までお問い合わせください。

展覧会スケジュール

【休 館 日】月曜日（祝日の場合はその翌日）年末年始 展示替期間中

【開 館 時 間】午前10時～午後6時（入場は午後5時30分まで）毎週金曜日は午後8時まで（入場は午後7時30分まで）

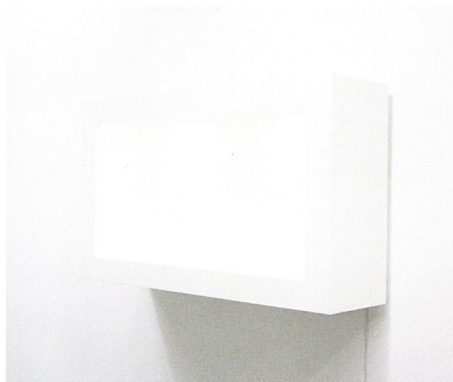
【ハローダイヤル】043-227-8600 【ホームページアドレス】<http://www.city.chiba.jp/art>

※展覧会の日程・名称は変更される場合があります。なお、企画展の入場料は展覧会ごとに異なります。詳しくは美術館までお問い合わせください。

◆ ミニマル マキシマル 「ミニマルアートとその展開」 6月3日(日)まで

1960年代のアメリカに登場したシンプルで幾何学的な形態による作品は、ミニマルアートと呼ばれ、20世紀後半の最も重要な美術の動向となりました。現在では私たちの身の回りのデザイン、建築、舞台美術そして音楽にも影響を及ぼしています。

本展ではミニマルアートとその後の多様な展開を、国内で初めて纏まったかたちとして紹介します。作品は世界屈指のコレクター・ミュージアムであるドイツのプレーメン・ウェーザーブルク現代美術館の協力を得て、欧米一円から集められます。



竹岡雄二〈ショー・ケース〉1996年

◆ 河井寛次郎と植木茂—ふたりの木彫 6月12日(火)ー7月29日(日)

わが国における近・現代陶の第一人者・河井寛次郎（1890-1966）と抽象彫刻のパイオニア・植木茂（1913-84）。ともに同時代のアーティストでありながら、活動領域が異なるためにこれまでは一緒に展示される機会はほとんどありませんでした。

本展は河井の晩年の制作活動に重要な位置を占める木彫と、植木芸術の核である木彫をあわせて展示することによって現代の造形に息づく伝統的なものへの関心を問うところみです。



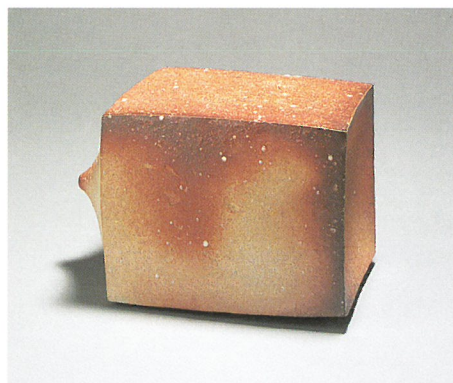
植木茂〈子ども〉1963年頃

◆ 千葉市美術館新収蔵作品展 6月12日(火)ー7月29日(日)

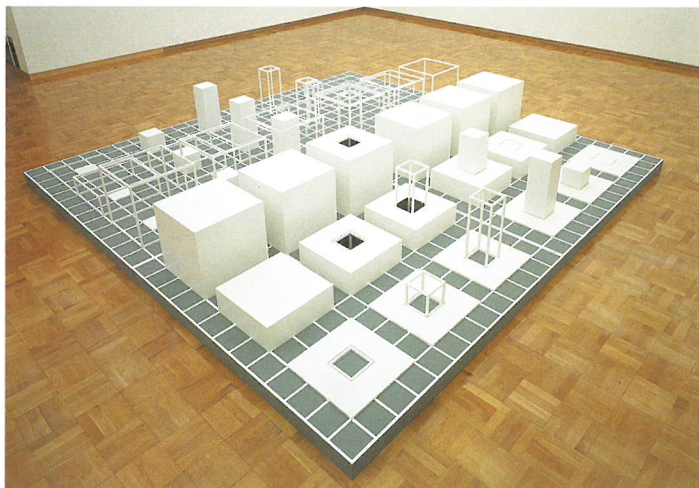
1995年に開館した千葉市美術館も昨年11月に開館5周年を迎えました。

良質な展覧会を開催する一方で、地道な調査活動や作品収集を継続して社会に貢献することも現代の美術館に求められる重要な役割です。今回の展示は1999年度以降に収集した主な作品をご紹介します。

出品作品は日本の作品や海外作家の作品、また時代も江戸から現代とさまざまですが、いずれの作品も興味深くお楽しみいただけます。



鈴木治〈春ノ魚〉1988年



ソル・ルウィット
〈シリアル・プロジェクト#1 ABCD〉
1966/83年

ソル・ルウィット（1928—）は、ミニマル・アートを代表するアメリカのアーティストです。今回紹介する《シリアル・プロジェクト#1 ABCD》は、当館で開催中のミニマル・アートの展覧会「ミニマル マキシマル」にも出品されています。

5m76cm角という巨大な正方形のベース上に、様々な大きさのキューブ（立方体、直方体、板状のユニット）が、複雑な組み合わせで並んでいます。よく見ると、小さなキューブとそれを包む大きなキューブの組み合わせが、格子模様のベース上に6×6の36組配置されていることがわかります。個々のキューブは、半数が面に覆われた箱状で、残りの半数がフレーム（枠）だけで作られています。箱状のキューブもフレーム状のキューブもそれぞれ3段階の高さのパターンをもつので、大小のキューブとも6つずつのパターンを持つこ

とになります。6パターンの大きいキューブと6パターンの小さいキューブの36パターンの組み合わせには、2つとして同じものが存在しません。それらは中央が高くなる規則正しい構造をかたち作っています。

ここまで読んだ方は、ちょっとした頭の体操をさせられたかのように感じたかもしれません。ミニマル マキシマルの出品作のなかでも、《シリアル・プロジェクト》は飛び抜けて複雑な構造をもっています。これはルウィットによって考え出された、幾何学的な秩序のモデルなのです。彼は、近代科学の理性的、合理的側面を芸術の分野に取り入れることで、伝統的な芸術制作に付きものの主観性を、できるかぎり作品から排除しようとした。この主観性の排除は、作品制作のプロセスにも反映されています。制作に入る前に、作家自身が数学的な秩序によって全体のプランを厳格に決定するので、実際の作品制作は、設計図に基づいて工業製品を組み上げるような、極めて機械的な作業になります。実際ルウィットが自らの手で作品をつくっているとは限らないのです。

本館学芸員 水沼啓和

美術館のご利用あんない

NTTハローダイヤル 043-227-8600

1-2階 SAYA-DO HALL
さや堂ホール

昭和初期に建設された、市内に残る数少ない貴重な建物（ネオ・ルネサンス様式）を新しい建物で包み込み、復元・保存したものです。

1階 MUSEUM SHOP
ミュージアム・ショップ

展覧会カタログ・美術図書、ミュージアムグッズがお求めになれます。

7階 AV CORNER
映像コーナー

ハイビジョンによる作品鑑賞、所蔵作品の検索ができます。また、千葉市美術館制作の番組をご覧頂けます。

10階 ART LIBRARY
図書室

室内の美術図書はご自由にご覧になれます。また、美術書の検索に関するご相談をうけたまわります。

[開室時間] 10:00~18:00

11階 RESTAURANT
レストラン

ランチタイム・喫茶にご利用下さい。

[営業時間] 11:00~21:00

- JR 総武線千葉駅
- 東口より徒歩約 15 分
- 京成バス大学病院行または南矢作行（のりば⑦）「大和橋」下車徒歩約 2 分
- 千葉都市モノレール県庁前行「葭川公園」下車徒歩約 5 分
- ※長らく皆様にご利用いただいておりました「チーバス」は3月末に運行を終了しました。
- 京成千葉中央駅東口より徒歩約 10 分

